

○高野 彬

構造物沈下量が70mmと地表の約1分の1の沈下を示している。また杭の軸力分布、沈下量と地盤各層の沈下量
 周面摩りつき、一軸圧縮強度との関係は図3の様である。

4 まとめ

以上の観測結果から

- (1)杭の沈下量は、地表面沈下量の約半分であり、中立点付近の地盤沈下量とほぼ一致する。
- (2)周面摩りつきが、 $\frac{8}{4}$ に近く、建築物設計標準等で述べられている $\frac{8}{2}$ をおり下まわっている。

(3)構造物の沈下量算定方法としては、

$$P + N_F = P_R \quad \left\{ \begin{array}{l} P: \text{構造物荷重} \\ N_F: \text{ネガティブフリクション} \\ P_R: \text{ポジティブフリクション} \end{array} \right.$$

により中立点を求め、中立点位置の地盤沈下量

を構造物の沈下量とする方法が考えられる。ただし、計算に用いる地盤強度の採用値の決定($\frac{8}{2}$, $\frac{8}{3}$, $\frac{8}{4}$)が難しく、これにより中立点の位置が変わり、沈下量計算結果に影響を及ぼす。

などが判明し、長尺摩りつき杭の沈下性状がかなり明らかになった。摩りつき杭基礎は、構造物が沈下する事を除けば、ネガティブフリクションが小さく、経済的に有利な形式であるし、更に調査、検討を加えていきたいと考えている。

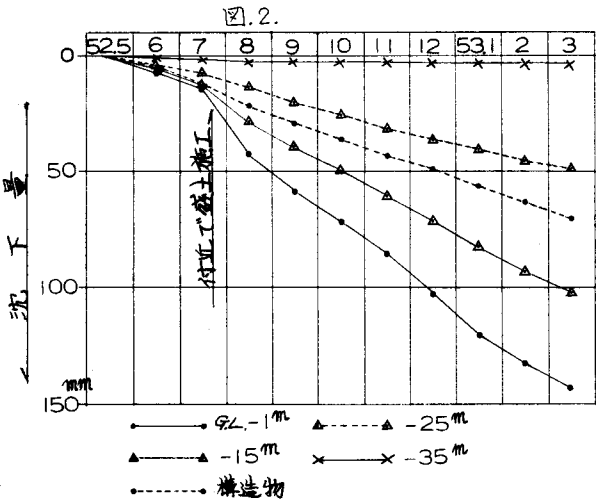


図3.

